

第4学年 社会科学学習指導案

日時：平成26年10月10日（金） 6校時
児童：4年1組 男10名 女9名 計19名
指導者：小笠原 佳之

【研究主題】ふるさとの復興を担う「人づくり」の展開 ～「自分から」かわり、学びを深める児童の育成～

私は、震災時、市内の海岸部の磯鷄小学校に勤務していた。地震が起きたのは、校庭での体育の時間。大きな揺れがかなり長い時間続き、校庭は地割れや液状化によって水が湧き出てくるという今までに見たこともない異様な光景となった。そんな突然の状況に泣き出す子どもも少なくなかった。その後は、子ども達の安全確保、避難所となった体育館の運営に追われ、震災から3日間は、家に帰ることも、テレビから情報も得ることもできなかった。そんな中、磯鷄のまちの様子を見に行ったら、愕然とした。流木で倒壊した家屋、瓦礫で埋もれ通行不能となった道路。いつものまちの様子は、そこにはなかった。避難所は、数日間、支援物資も思うように届かず、半ば孤立状態となった。この時、感じたことの1つが「道」の大切さである。普段は当たり前に行っている道、車で走行している道であるが、そのありがたさともろさを感じずにはいられなかった。

本単元「昔から今へと続くまちづくり」では、地域の発展に尽くした先人として牧庵鞭牛を取り上げる。鞭牛は、国道106号線の基となる閉伊街道づくりに尽力した地域の先人である。鞭牛は、幾多の工夫・知恵、苦心を重ねて、道づくりを成就させた。そこには「凶作や飢饉に苦しむ地域の人々の命を救いたい」という強い信念があった。学習を進めるにあたっては、様々な資料提示によって、鞭牛の工夫や努力について気付かせ、それらを支えていた強い思いを実感させていく。また、今、当たり前にある「道」にも、先人のそんな工夫・知恵、思いが隠れていることにも気付かせていきたい。単元後半では、現在建設中の復興道路（三陸沿岸道路）を取り上げる。平常時の地域住民の生活の向上、災害時の安全確保、支援物資の敏速な運搬等を目的につくられている復興道路を取り上げることで、今も昔も、そして未来に向けても、地域の人々の命を守るために「道」があることを実感させ、地域社会に対する理解と愛情を育てていきたい。

1 単元名 「昔から今・未来へと続くまちづくり【閉伊街道と復興道路】」

2 単元の構想

(1) 学習指導要領に示されている指導目標及び内容

○目標

第3学年及び第4学年の目標

- (2) 地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。
- (3) 地域における社会的事象を観察、調査するとともに、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。

○内容

- (5) 地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えられるようにする。

ウ 地域の発展に尽くした先人の具体的事例

○学習の系統（思考・判断・表現）

＜第3学年及び第4学年＞

地域社会の社会的事象の特色や相互の関連について考える力、調べたことや考えたことを表現する力を高めるようにする。

＜第5学年＞

社会的事象の意味について考える力、調べたことや考えたことを表現する力を高めるようにする。

＜第6学年＞

社会的事象の意味をより広い視野から考える力、調べたことや考えたことを表現する力を高めるようにする。